

日本学術振興会 研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）  
事後評価（平成29（2017）年度採択課題）結果

日本側拠点機関名 京都大学野生動物研究センター（特任教授・幸島 司郎）  
研究交流課題名 大型動物研究を軸とする熱帯生物多様性保全の国際研究拠点

評価結果（総合的評価）

- S 想定以上の成果をあげており、当初の目標は達成された。
- A 想定どおりの成果をあげており、当初の目標は達成された。
- B ある程度成果があがり、当初の目標もある程度達成された。
- C 成果が十分にあるとは言えず、当初の目標はほとんど達成されなかった。

所見

本事業は、希少動物を含む大型動物の生態および行動調査等や先端研究技術開発を各相手国と共同で実施している。期間後半では新型コロナウイルス感染状況悪化のために海外渡航が制限され、研究活動や交流に様々な障害があったと思われるが、それにも係わらず目標とする熱帯生物多様性保全の国際研究拠点の構築にむけて着実に前進している。

多国間での共同研究、国際セミナー・ワークショップによる研究交流と若手研究者の資質向上に取り組んだ結果、相手国拠点と大型動物の保全に関わる世界的水準の学術的成果が得られた点は評価できる。研究成果の多くは多様性保全という観点から社会的に貢献できるものである。一方、世界的水準の研究交流拠点形成という本事業の趣旨を鑑みると、研究発表の質と量の両面において更なる発展が求められるだろう。中間評価においても課題とされた点であり、最終年度に大幅に改善されているが、これを常態として精力的に成果発信に務めていただきたい。

若手研究者育成の面では、国際セミナーや国際実習、調査研究などを通して若手研究者の交流がはかられ、とりわけ3年間継続された国際実習は評価できる。本事業の共同研究を基に学位を取得した相手国学生がいることや、若手研究者の論文発表等に繋がっていることから、若手研究者育成への貢献があったと判断できる。国際共同セミナーの枠組みを活用し、より多くの国内大学院生や若手研究者の参加を促す工夫を早い時点から実施できていれば、より波及効果が得られたであろう。

個々の研究活動を連携させ熱帯生態系の多様性保全に関する全体としての繋がりの構築は今後も含めての課題であるが、本課題で培われた研究ネットワークがさらに深められ、学術的・応用的にユニークな貢献がなされることを期待している。